

東南アジア研究旅行

小林 博

1983年、定年退職を間近にして、小生にはなすべき事柄が1つ残っていた。それは、東南アジアの大学との交流をぜひ実現しておくことであった。市大の地理学教室は、村松教授の指導のもと、マレーシアの研究を行ってきたという伝統があった。国際的な研究交流は今では広く行われるようになってきているが、当時はまだ初期の段階で、他大学でもあまり注目されていなかった。この特色を今後も発展させていきたいと思っていたので、教室で提案したところ、参加希望者が多かった。村松先生も賛成して下さったばかりか、途中で一寸失礼するけれど、御自分も参加するとのことであった。さらに加えて幸いなことに小生のもとに張志偉さんが院生（香港中文大学卒・日本の国費留学生）としていたので、何かと連絡にあたってもらった。こうして初の海外旅行が実現した。その要旨は以下の通りである。

(1) 旅程 1983年12月15日～22日、参加者16名

(2) 経路 大阪～シンガポール～クアラルンプール～ベナン～ホンコン～大阪

(3) 訪問大学

シンガポール大学地理学教室、主任教授Prof. Jim Bee Doi、案内Dr. Limkeak Chengほか

マラヤ国立大学地理学教室、案内 Dr. Boom Tong Lee

香港中文大学地理学教室、高級講師 呉仁徳、Dr. 徐勝一ほか

(4) 行動の概要

①シンガポールにおいて。

大阪からまずシンガポールに直行する。空港は島の東端に新しく、日本の建設会社が造成したもので、当時としては日本の空港を凌ぐ立派なもの。

シンガポールでは、市の住宅局を訪れて、都市計画の説明を聞き、郊外のニュータウン、アンモキョー Ang Mokie の見学を行った。CBDへは地下鉄による短時間連絡をはかり、目下建設中。

その他で注目される計画では、これも建設中のCBDの再開発（ラフスホテルの隣接地区にラフスシティを建設中）、中国人街の改造、埋立による新港湾地区の拡大整備がある。また、島の西端ジュロン地区の工業地帯造成も進展中であった。この地帯はかつてはマングローブの広がる低湿地で、戦時中、島にいた小生にとってはなつかしところである。

国立シンガポール大学は往事の軍の施設を転用したと思われる場所にあり、新しい図書館の案内をへたのち、地理学教室を訪ね、教室のスタッフや院生と懇談する。地図類や、機械器具の充実はまだこれからと思われた。今後の研究交流を話しあって別れる。学生の進学傾向は、一番むつかしいのがシンガポール大学、つぎがロンドンを中心とするイギリスの大学、それが駄目ならオーストラリアの大学といった順であるという。

②クアラルンプールとマラヤ国立大学

シンガポールからマライの首都クアラルンプールへは鉄道（特急）で行く。車窓からは世界的に有名なゴム林が続くが、近年は油ヤシ栽培への転向が活発であるという。首都の関心事は、クアラルンプールと港市ポートクランを含めた広大な地域の首都圏計画で、その中央付近にシャーラムニュータ

ウンを建設しつつあったが、その勢いはシンガポールには及ばない。しかし、駅近くの線路沿いには不法居住者 squatteres の集住地区が形成され、問題となりつつあった。マラヤ国立大学では、大阪からFaxで連絡してはいたが、地理学教室がしまっていて、代わりにDr. Boom-Tong Lee氏が対応され、政府の諸施設（国会議事堂や国民広場など）、新首都圏計画、新旧都心、近くの銀山、ゴム園、ヤシ油工場などを案内してくれた。

③歴史的保養都市ベナン

ベナンではバターワースとベナン島を結ぶ橋の工事が進展中で、これが完成すれば保養都市としての発展がさらに期待される。工事は韓国資本が落札したという。さきのラフルスシティも韓国資本とその労働力によるもので、注目された。ベナン島はその東西両側の対比が顕著である。

④香港中文大学地理学教室

張志偉さんの母校で、九竜側の丘の中腹にある。前もって連絡してあり表敬訪問をする。地理学教室のスタッフと交流し、そのあと張さんの案内で市内を見る。中国返還はきまっていますが、まだ未知数の面が多く、景観もその影響を受ける。例えば九竜側で、都心に直結できる大埔ニュータウンは、他面で中国本土に隣接するからいざというときのプラスとマイナスを考慮して、必ずしも入居率は高くないという。それが景観にもあらわれる。現在どのように変化したかの考察は大きな課題であろう。

以上が教室旅行の素描である。僅か一週間たらずの短时日であったが、身をもって東南アジアの実態に接することができたのは大きな収穫だったといえる。そのためであろうか、以後今日まで東南アジアを研究対象とし取上げるようになった当時の院生が少なくない。

(旧教員)



1983年ツアー参加者たち